

若年被災者の声を活用した震災伝承活動*

東北大学災害科学国際研究所 齋藤由美子, 佐藤健

1. 研究の経緯

仙台市が掲げている学校教育に関する主要施策「杜の都の学校教育」の中で、令和4年度から仙台市の全小学校で震災遺構荒浜小学校の見学が位置付けられ、各学校において事前・事後学習を含めた震災伝承活動が進められてきた。各学校で工夫した取り組みが見られるものの、事後学習については、震災遺構荒浜小学校の見学の感想を共有することにとどまり、十分な活動とは言えない学校がまだ多いと筆者は感じている。そこで、10代で東日本大震災（以下：震災）を体験した若者達が現在の思いや願いを綴った書籍「声を掬う」を活用した新たな視点からの震災伝承活動の開発を試みた。

2. 研究の目的

- 同世代の震災体験や現在の思いを知ることが、災害を自分事として考えを深める契機となり、震災の伝承活動のひとつとしてどのような効果があるかを調査する。
- 若年被災者をロールモデルのひとつととらえ、自分の生き方や考え方、人との関わり方を考える契機となり得るか調査する。

3. 実践方法

震災遺構荒浜小学校の見学を終えた仙台市内の小学校第5学年に「声を掬う」を読ませた。「声を掬う」は、震災当時荒浜地区に居住していた小中学生7名（以下A~Gと示す）と当時の荒浜小学校の校長先生（以下Hと示す）に、2021年から2023年にかけてインタビューした内容を書籍化したものである。A~Hは、震災当時のこと、自宅跡のこと、荒浜を訪れる人へ伝えたいことなどについて、現在の心境を語っている。各自が語った主な内容は表1に示すとおりである。

表1 「声を掬う」A~H各自の内容

A 当時 7 歳	友達や親戚の葬式に出席した。震災後に病気で祖父と父を亡くした。荒浜のことをもっと二人から聞いておけばよかった。自宅跡は草刈りすらできず、もどかしい。もう一度、あの場所に住めるのならば住みたい。現在は教師を目指しており、震災のことを子供たちに伝えたいと考えている。
B 当時 12 歳	荒浜はキャッチボールをしたなど、楽しい思い出の場所だ。ここに来ると震災のことを思って、悲しい気持ちになる人が多いが、楽しい場所であったことを知って欲しい。
C 当時 16 歳	学生時代は出身地を聞かれるのが辛かった。周りにかわいそうな人と見られなくなかった。自宅が復興モニュメントの場所になったことに複雑な思いがあり、買い取れるなら、借金をしてでもまたここに住みたいと思う。荒浜に生まれてよかったと思う。震災後、荒浜を好きで来てくれる人もいるから、そういう人たちと何かできたらと思う。
D 当時 15 歳	同級生を震災で亡くした。亡くなった友人のことは忘れないし、自分が忘れてしまったら、彼が生きた証が亡くなってしまおうと思う。荒浜にまた人が戻って来てくれるきっかけ作りとして、灯籠流しの日に打ち上げ花火や正月のイベント企画に携わっている。

* Disaster legacy activities utilizing the voices of young disaster victims by Yumiko Saito & Takeshi Sato

E 当時 15 歳	同級生を震災で亡くしたが、なかなか受け入れられなかった。現在は毎年、墓参りに行っている。自宅跡がかさ上げ道路になってしまったことは、まだ心が追いつかない。荒浜に恩返しできることがあれば参加したい。3月11日は「再会の場」荒浜へ行けば知人に会うことができる、大切な時間だと感じている。子供たちへ伝えたいこと、家族や友人と過ごせる時間を大切にしてほしい。
F 当時 12 歳	震災後に何か残っているものがないか、何度も自宅周辺を訪れた。震災後に新しい物が作られているが、旧住民に知らされずにどんどん進んでいくところは切なく感じている。荒浜を「被害を受けた町」とだけ見るのではなく、地域のつながりが深い場所だと知ってほしい。自分にとって大切な場所である。
G 当時 10 歳	震災の2日後が11歳の誕生日で、避難所でみんなが祝ってくれた。今は受け入れているが、自宅跡がかさ上げ道路になった直後は、思い出の場所がなくなったような、自分の家を踏んでいるような気持ちだった。自分の体験を伝えるには教師になるのが良いと思い、仙台市内の小学校教員になった。
H 当時の 校長先生	荒浜小に避難して助かった方が多くいるものの、この地区では約190名の方が亡くなっており、もっと何かできたのではと思うことがある。震災遺構に訪れる人には、このような事実があったことを見てほしい。見るだけでなく、どう行動したらいいか考え続けてほしい。

実践した仙台市内の小学校第5学年児童には、①共感したところ②心に響く言葉や出来事③自分の生き方に取り入れたいことの3点について、学習アプリ「ロイロノート」を用いて回答させた。児童にA～Hのうち、一番心に残った人をあげさせ、前述の3つの項目から、筆者が感じ取った主旨や頻出単語をキーワードとして集計した。

4. 実践結果

A～Hのそれぞれについて、筆者が感じ取った主旨や頻出単語をキーワードとして集計したものが表2である。A, B, C, Fの記述が一番心に残ったとする児童の多くが、「震災に焦点化してこの地区はかわいそうな場所と位置付けてほしくない。可能ならばもう一度荒浜で暮らしたい。」という記述から、自分も故郷を大切にしたいという感想をまとめていた。Dは友人を亡くした悲しみを吐露しており、それに自分を重ねて考えた児童が見られた。Eは様々な内容を語っていたことから、児童の回答内容にもばらつきが見られた。Gを挙げた児童は、避難所で誕生日を祝ってもらったエピソードに共感していた。Hは備えや避難の重要性を語っており、児童はそれを受け止めた記述をしていた。また、家財の喪失や身近な方を亡くすといった非常に困難な状況乗り越え、現在、A～Hらが前向きに自分の道を切り開こうとしているところに共感する児童が多く見られた。

全回答数に対する割合に整理したものが表3である。A～Hがそれぞれ故郷に対する思いを語っていることから、それに対する共感がもっとも高く36.9%にあたる。しかし「困難を乗り越える強さ・前向きな気持ちを見習いたい」(14.6%)「命の大切さ・今を大切に生きたい」(9.9%)などの感想が多かった。

5. 考察

A～Hらは、震災から今日に至るまで様々な葛藤があったものの、現在は前向きにそれぞれの道を歩んでいる。その背景として、家族、友人、地域の人など、様々な人と関わることで立ち直るきっかけや、心の拠り所を得ることができたことが挙げられる。荒浜地区では、運動会や防災訓練など地区単位で参加する活動や、祭りなどの年中行事もさかんに行われていた。また、貞山堀や松林、海岸での活動もA～Hらにとって思い出深いことから、これらの場所を介して日常的に地域の結び付きが強まっていたことがうかがえる。地域の結び付き

が強ければ立ち直りが早いとは一概には言えないが、地域での活動に積極的に参加したり、結び付きを持っていたりしたことが A～H らのレジリエンスに繋がっている面は確かに感じられる。災害は継続的・連続的なものであると筆者は考えており、「声を揃う」の読書活動は震災遺構を見学しただけでは得られない、地域の方の思いに触れることができる好事例ではないかと考えている。

表 3 の結果からも、「困難を乗り越える強さ・前向きな気持ちを見習いたい」「命の大切さ・今を大切に生きたい」などの感想が 30.4% になることから、児童は、震災遺構の見学だけでは知り得なかった旧住民の思いを感じ取っており、自分の生き方や人との関わり方を見つめ直す契機となったと考えられる。

6. まとめ

自分の生き方、考え方、人との関わり方について、児童の変容を評価することは難しいが、指標のひとつとして仙台市内で小学校全校へ毎年実施している「仙台市標準学力検査および仙台市生活・学習状況調査」が挙げられる。生活に関する質問紙の中で、将来についての考えを問うものやキャリア教育に関わる内容に関わる項目がある。(表 4) これらの項目は仙台市全体では、学年が上がるにつれて下降する傾向にある。

今後は、複数の学校にて実践・調査を重ね、これらの項目の 28「将来の夢や目標」、64「地域の行事に参加したいか」などについて差異が見られるかなど、キャリア教育につながる効果があるか検証を重ね、震災伝承活動の新たな視点として価値を見出していきたい。

表 2 児童の感想の中から筆者が感じ取った主旨や頻出単語

選択した割合	筆者が感じ取った主旨や頻出単語について回答数に対する割合
A 22.5%	故郷への思い (45.3%), 災害の脅威 (13.2%), 震災伝承 (13.2%) 命を大切に (9.4%), 前向きな気持ち (7.5%)
B 12.7%	故郷への思い (40.0%), 前向きな気持ち (26.7%), 災害の脅威 (10.0%), 訓練 (6.7%), 命を大切に (6.7%)
C 8.9%	故郷への思い (52.4%), 前向きな気持ち (19.0%), 災害の脅威 (14.3%) 命を大切に (9.5%), 訓練 (4.8%)
D 2.5%	亡くなった友達について (66.7%), 前向きな気持ち (16.7%) 命を大切に (16.7%)
E 5.1%	故郷への思い (33.3%), 前向きな気持ち (16.7%), 命を大切に (16.7%) 人との関わり (16.7%), 日常生活のありがたみ (16.7%)
F 8.9%	故郷への思い (38.1%), 前向きな気持ち (19.0%), 復興に対する戸惑い (14.3%), 命を大切に (9.5%), 災害の脅威 (4.8%)
G 9.3%	命を大切に (22.7%), 故郷への思い (18.2%), 前向きな気持ち (18.2%) 亡くなった友達について (13.6%), 個人のエピソードに関して (13.6%)
H 5.1%	備え (25.0%), 前向きな気持ち (25.0%), 災害の脅威 (16.7%) 故郷への思い (16.7%), 適切な避難 (16.7%)

表3 全回答数に対する割合

故郷を大切に思う気持ち	68	36.9%
困難を乗り越える強さ・前向きな気持ち	30	16.3%
命の大切さ・今を大切に生きたい	20	10.9%
災害の脅威	17	9.2%
死者への思い・悲しみに共感	11	5.9%
震災伝承	9	4.9%
備えや訓練の大切さ	8	4.3%
復興への戸惑いに共感	5	2.7%
個人のエピソードに触れた内容	5	2.7%
今後の人との関わり方	6	3.2%
日常生活のありがたみ	4	2.2%

表4 「仙台市標準学力検査および仙台市生活・学習状況調査」内の関連する項目

質問番号	質問内容
10	人の気持ちがわかる人間になりたいと思う
11	人の役に立つ人間になりたいと思いますか
28	将来の夢や目標を持っていますか
29	自分の将来を考えると、楽しい気持ちになりますか
30	自分の将来について、家の人と話し合っていますか
64	地域の行事に参加したいと思いますか
65	地域の歴史や自然について、興味や関心がありますか

本研究は公益財団法人上廣倫理財団の支援を受けました。